三十一　朝ぼらけ　有明の月と　見るまでに　吉野の里に　降れる白雪

坂上是則



雪景色

〈声に出してよんでみよう〉

アサボラケ　アリアケノツキト　ミルマデニ　ヨシノノサトニ　フレルシラユキ

＊第二句の「有明の月と」の、音の数を数えてみましょう。「ア・リ・ア・ケ・ノ・ツ・キ・ト」。八音ですね。これは、「五・七・五・七・七」の定型からはみ出してしまっています。このような場合を「**字余り**」と言います。反対に、足りない場合は「**字足らず**」と言います。しかし、どちらの場合も音読する時はあくまでも「五・七・五・七・七」のリズムに乗せて読みます。このため、字余りの歌には切迫感が、字足らずの歌には空白感が、生まれるという効果があります。

〈どんな意味だろう〉

朝、ほのぼのと夜が明ける頃、有明の月の光かと思ったが、それは、吉野の山里に降っている、白い雪だったよ・・・！

＊「朝ぼらけ」は、朝、空がほのかに明るくなる頃。「有明の月」は、陰暦十六日以後、夜更けに出て、翌朝まで空に残る月。

＊吉野は、奈良県にある「**歌枕**（歌によく詠まれる名所）」。春は桜、冬は雪で有名な山です。「百人一首」では、他に、「九十四　み吉野の」の歌に詠まれています。



桜



雪景色

＊この歌は、「白雪」という名詞で終わっています。このような技法を「**体言止め**」と言います。名詞は、体言とも言うからです。通常の文は、体言ではなく、動詞や形容詞といった用言、助動詞、助詞などで終わります。このため、「体言止め」は、あとにまだ何かが続くような感じを与え、**余情**・**余韻**を生み出す効果があります。

〈解説〉

この歌は、明け方近く、白く冴え渡る光を見て、有明の月の光かと思ったところが、白い雪であったのだ、と気づいた、驚き・感動を詠んだものです。このように、あるものを別の何かに見なしてたとえる技法を「**見立て**」と言います。雪や霜を月の光に見立てたり、また、その逆の見立てをしたりすることは、中国の詩にもよく用いられた技法です。冬の朝の澄み切った冷たさを、よく表した歌だと言えるでしょう。

〈作者と出典〉

作者の坂上是則（九～十世紀頃）は、平安時代前期に活躍した歌人です。蹴鞠の名手であったとも伝えられています。

この「三十一　朝ぼらけ」の歌の出典は、最初の**勅撰和歌集**（天皇の命令で編集された和歌集）である『**古今和歌集**』（九〇五年成立）です。